誌上行学講習会

高佐日煌上人

弘法大師がいろは歌をつくりました。諸行無常これ生滅の法、生滅滅しおわって悟りを楽しむという有名な雪山童子の偈文。色は匂へど散りぬるを、つまり諸行無常、吾が世誰ぞ常ならむ。これ生滅の法。有為の奥山今日越えて、生滅滅し終ってそういう無常転変を乗り越えて。浅き夢見じ酔いもせず、迷いを越えて悟りに入った楽しみすばらしい境地だと皆さんもお考えでしょう。しかしおどろくなかれ実はこれだけであってはいけない。いのです。仏教の悟りはもう一歩進んだところ、それこそ菩薩の世界であります。菩薩とは正式には菩提薩埵（ボディサトバ）と言います。菩提とは悟るということ、薩埵は有情。有情とは色気と欲気のことを言うのです。菩薩とは人間が色気と欲気を捨てないで、しかも仏と同じ悟りの境地に立つことを言うのであります。仏教の本当の悟りは此々にあるとされています。人間を消すのでもなく人間を廃業するのでもない。人間を廃業することは天地自然にそむくことですから。人間をよりよく生かして行くという立場こそボディサトバ（菩薩）と言うのであります。

菩薩は六度と申しまして六道を悉く生かして行くのであります。菩薩心の地獄心は忍辱心。これはじっとこらえる心。普通は瞋りの心であります。菩薩心の場合は逆に忍ぶ心になる。かつて日露戦争時代に有名な「最後の五分間」という言葉がはやりました。戦地でざん濠を掘って打ち合う、そのつらさは敵も味方も同じである。

お互いに相手の疲れを待っている。何時間もそうしていると全く参ってしまう。この時「最後の五分間」力を入れて全く参ってしまう。緊張し頑張ったものが勝利を得るというのであります。何の場合でも「最後の五分間」が大切という教訓であります。菩薩は人間の持つ本当の底力というものを示すものであります。これは思慮分別菩薩心のものは欲を落着いてあて考えるのであります。菩薩はあくまでも静かに菩薩心は愚痴の反対で智慧心。智慧とはものごとに迷わず正確にとらえることを自分で照らす光りであります。菩薩はその智慧を分の心を自分で磨き出すのであります。菩薩心の修羅心は慢の反対で精進心。慢がうぬぼれ、精神は努力であります。同じ負けないという心でも、事にあたってなまけない。懈怠をいましめるけっぱきな心で生きる。これを精進と言うのであります。

以下次号